

あなたは神の作品

[聖書] マタイによる福音書 6章 25～34節

「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思ひ悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自らが思ひ悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

[1] 教会を支える主イエスの目線

また今朝も「聖書教育」誌から離れて、私の心に今響いているみ言葉からメッセージをさせて頂きたいと思ひます。

この時期、私たちにとって「**教会がなぜあるのか**」という、その原点を見直していくということがとても大事なことのように思ひています。先週は「イエス様に対する信仰告白」ということを見ました。「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」とイエス様は言われました。私たちの共通の土台、岩は、「**イエスは私の救い主です**」という信仰の告白です。この共通の岩の上に立っていれば、お互いは、夫々の違い性を認められるのです。逆に言えば、それ以外は違ひいいのです。パウロもこのように言ひました。—「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。…もはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」(ガラテヤ 3:26、28)。これは、一つに束ねるという発想ではなく、同じ命に生かされているお互いなのだから、夫々の個性や性質を重んじて行け

る、と言うことでもあるでしょう。時代を先取りしているとも言えますね。

そして、「教会」の基礎、基盤、それはそもそも、**主イエス・キリストの目線**というものがそこにはあるのだ、と思います。それを今日はご一緒に見たいと思います。その、イエス・キリストの私たち人間を見つめる目線が一番よく表れている言葉の一つが、今日の箇所なのではないかと思います。

この箇所が好きな人は多いと思います。私も大好きです。実は、私の所沢の家のすぐ近くにウグイスが縄張りにしている木があるようで、ついこの間まできれいな声を聞かせてくれていました。朝などにあの澄んだ鳴き声を聞くだけで癒されます。「**空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。**」とイエス様はおっしゃいました。“あなたは鳥を見て、「いいなあ」と思うでしょう、でもその鳥を養い、生かしているのは、天の父なる神様なのです。そして、あなたがたは、鳥よりも価値ある存在なのです”とおっしゃいます。嬉しい言葉です。イエス様はさらに続けます。“あなたがたは生活のことでいつも思い悩むけれど、野の花を御覧なさい。無造作に道端に咲いている花の一つ一つも、その季節季節の美しさを見せてくれているでしょう。それは王様の装いにも優るもの、種から芽が出、時が来れば蕾が開き、夫々の花を咲かせるという命の不思議です。けれども、あなた方人間に対して**神様は、それ以上に心にかけていて下さっているのですよ**”とイエス様はおっしゃいます。

私たちは、「教会」として、この言葉を信じたいと思います。以前にお話ししましたけれども、私たちは、教会と言う「**神様の畑**」に蒔かれた「**種**」なんです。神様の力で、神様の養分で、養いで、その畑は実るし、色々な花を咲かせるんです。「**色々な花**」です。川越教会の庭のようです。もし、この花だけしか咲けません、あとは抜きます、と言っていたら「教会」ではなくなるでしょう。例えば、教会は牧師がワンマンになったら一番危ないです。そうならないようにどうぞ皆さん、牧師（夫妻）のために祈って下さい。私自身本当に牧師の役割というものを模索しておりますが、同じ信仰の告白に立ちつつ、互いの違い性を受け容れ合いながら、その中で、神様に生かされ、赦され、交わることが出来ることを喜ぶ私たちの教会でありたいと思います。けれどもサタンは巧みです。「**人間の思い**」が「**神様の思い**」を見えなくしてしまわないよう、**互いの牧会**をして行きましょう。

具体的には本当に「祈り合って」行きたいですね。「神様の畑」の養分は、「**み言葉**」ですから、それを頂いて、分ち合い、祈る。それがないと、神様の畑の土は痩せていってしまうと思います。今度の**コロナ**は、試練を与えてくれていると思います。こういう時だからこそ、私たちはみ言葉に立ち返りたい。皆さん、今

年度の聖句を覚えていますか。週報にも書かれています。ヨハネ 15:4 です。—「わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている」です、ね。

[2] 「はなはだ良い」と言われている存在

今日の聖句で言われている一つのテーマは「**思い悩み(思い煩い)**」です。イエス様は、それが人間の心の中にいつもあるのをよくご存じなので、その思い煩いというものから自由にされて行くことの大切さを教えてくれているように思います。私たちは、思い煩わない日はないのではないのでしょうか。

しかし、今日のイエス様のお話はちょっと逆説的だと思うのです。と言うのは、空の鳥や、野の草花、これらは「思い煩い」から自由だと思うのです。鳥たちは自分が鳥であることをやめたくなくて絶望的になるということはないでしょう、多分。人間だけが、不自由なのです。けれどもイエス様は、その私たち人間に対して、「あなたがたは鳥よりも価値あるもの」だ、そして、天の父は「あなたがたに対しては(野の草花より)なおさら」心にかけていて下さるお方だ、とおっしゃっているのです。これは驚きではないのでしょうか？ 神様は本当に人間を慈しんでいらっしゃる。どんなに心が思い悩みに捉えられていようが、そんなことは重々承知の上で私たちを愛し、包み込んで下さるのです。私たちが自分の存在の価値を決めてはいけなのです！これはとても大切なことです。(ルカ 5:30～31 参照)。

私はそんなことを思っている時、とても考えさせられた映画の DVD を見ました。想田和弘監督の『精神』という映画です(2009年)。所謂精神を病んだ方たちが、岡山県の山本医師(高齢者です)の診療所を訪ねるのです。古い民家の造りで、そこに小さな診察室と、離れのような所に待合所があります。そこでは煙草も自由だし、寝っ転がっていてもいい。スタッフたちとお喋りもする。正に居場所なんですね。既に何十年も山本医師と関りを持っている者たちもいます。重たい人もいれば、今は軽度の症状の人もいます。その様子をナレーションも音楽もつけずひたすら撮影する「観察映画」です。本人の言葉、表情、風景が全てです。

山本医師はある訪問介護の人への講演の中で、「皆さんの働きはとても重要です。みんな『お前はダメだ、もうダメだ、ダメだ』と言われ続けた人たちだから、とにかくその本人の言葉を聞いて欲しい」と言われます。人が病む原因はそれぞれであって、そこには他人が分からない事情や環境があるのですね。でも、そういうものがその人の存在の否定には繋がらない筈です。繋がってはいけません。そのような強い信念のようなものを山本医師から感じました。

また、或る 60 歳の方の言葉です。自分は 20 歳の時に失調統合症になって、人の**偏見**というものを知った、と。また、自分でもそういう**カーテン**を作って、心を閉ざしてしまった。けれどもそれから解放されてきたと言います。何故です

か？ と問われると、「段々と、精神病者とと言われる人も、健常者とと言われる人も、完全な者は誰もいないんだ、全人的に皆どこかで病んでいると分かって来た。今の私は、健常者の中に入ったら、その健常者の欠けを補うようなことをしたい」と語っていました。凄い言葉だと思いました。何と成熟した人でしょうか。

また、屈託なくよく笑うおじさん（50歳位？）で、昔神田正輝のようだったという男性（今はよく太っていてヘビースモーカーでもある）が、短い詩を写真と一緒に合せながらノートに綴っていて、その中の詩を、仲間の女性が紹介する場面があるのですが、その詩がとても心に響くんです。それを紹介したいのです。

<笑顔> みんな笑顔でいたら どんなに心安らぐだろう

だから笑顔になりたい 今日からは

<ありがとう> 自分の十字架が重すぎて、

たくさんの人に支えてもらいながら生きています ありがとう

<野の花> 雨に打たれ 風に揺られ きのうよりも きれいになった 野の花よ

<生きる> 人は生きていなくても 働いているのです

なにげなく咲く 野の花が そっと人の気持ちをいやすように

こんな詩もあります。

<裁き> なぜそんなに肩身の狭い思いをしなければならないのですか。なぜもっと自由な心になれないのですか。なぜ それは結局自分が自分を心の中で裁いているからなのではないでしょうか

この詩は深いですね。私たちはすぐ“裁判官”になってしまうのですね。それは罪です。人間が、誰かの、そして自分の裁き主になってしまうというのは罪です。何故ならば、私たちは皆神様の作品だからです！「はなはだ良かった」と造られた存在なのに、その自分を「お前はダメだ」と見てはいけないのです。「あなたがたは（思い煩わない）鳥よりもはるかに優れたものではないか」とイエス様は言って下さいます。いえ、言って下さっただけでなく、私たちのために十字架で死んで下さったではないですか！ それはたちを本当に「生かす」ためです。「教会」という所は、この、主のご愛が支配し、それだけが土台となり、畑となって、私たちを互いの違いを喜び合える、そういう場だと思えます。「世には無き交わり」です。その中心にいる主に繋がって、支え合いながら生きて参りたいと思えます。

お祈り致します。神様、私たちの命はこの私のものではなく、あなたのものです。一人ひとりをユニークな存在として造って下さいました。そして主は私たち一人ひとりを愛し抜いて十字架で私たちの罪も思い煩いも全て背負って下さいました。その愛の中で私たちの一致を与えて下さい。主の御名によって。アーメン。